

読書行為の規定と越境

—南アフリカにおける書物・出版文化史研究動向の紹介—

上林 朋広

はじめに

ヨーロッパ世界の拡大によって形成された植民地の大部分がそうであるように、南アフリカにも本は外部から持ち込まれた。本は、ヨーロッパから来た宣教師とともに、また南アフリカの土地を切り拓き、一旗揚げようという入植者とともに、そしてアフリカ人の王国を征服し、植民地の領土を広げようとする兵士たちとともに、アフリカの土地を北上していった。しかし、その特定の本は意外な場所で見つかった。文学研究者のアトウェルは、1878年フロンティア戦争と呼ばれる入植者社会の領土拡大を目的とする戦闘の後に、一冊の本、イギリス人宗教家ジョン・バニヤンの『天路歷程』が敵であるコーサ人の亡骸の一つから見つかったという植民地軍の報告を紹介している。本の見返しの遊びには、この本の持ち主が、スコットランド宣教師が設立したアフリカ人向けの学校ラヴデール学院の卒業生、ポール・ンクピソであると記されていた。彼は、成績優秀のため賞与としてこの本を贈られたのである。焦ったのは、ラヴデール学院を運営する宣教団であった。労働市場でアフリカ人と競合することを恐れたヨーロッパ人入植者たちは、アフリカ人の教育に批判的であり、ラヴデールが与えた『天路歷程』が敵陣で発見されたことは、入植者たちに絶好の攻撃材料を与えることにもなりかねなかった。すなわち、同学院は植民地の敵を養成しているのだと。これに対して、ラヴデール学院の校長であったジェイムズ・スチュワートは、死んだとされているンクピソが先週学校を訪れて、ラヴデール学院の卒業生が植民地社会の敵となっていたという噂はデマであると証明したのだと返答する¹。

しかし、本が見つかったこと自体は本当だとするならば、なぜこの本の死んだ持ち主は戦場で『天路歷程』を携帯していたのだろうか。アトウェルはこの問いに対し、そのコーサ人が、ヨーロッパから持ち込まれた本という得体の知れないものが、銃というもう一つの得体の知れないものから彼を守ってくれる魔除けとしての力を持つのではないかと考えた可能性を指摘する²。フロンテ

(2)

ィアの向こう側で見つかった一冊の『天路歷程』は、アフリカ人の教育を宣教団体が担ってきたことを体現するというだけではなく、モノとしての本に込められた意味という点においても、南アフリカの歴史において書物や出版の重要性を示す象徴的な事例である。

本論文は、南アフリカを中心としたアフリカの書物・出版文化史を対象とした研究を整理し、その史学史をたどることで次の二点を主張する。第一に、南アフリカの歴史をそこに住む黒人と白人が作り出す複雑な関係の歴史として捉えるとき、出版文化は、その歴史を見る際の非常に重要な視角であるということ。第二に、書物・出版文化史において、アフリカという地域の重要性を説くこと。書物史においてアフリカは、全く等閑視されているか、非常に簡略に言及されるにすぎない³。しかし、識字能力の社会的意味や、出版文化の歴史を一国史的にではなく、地域や言語を越境して構成される歴史として捉えられることを明らかにする点で南アフリカの事例に基づいた研究は、書物・出版文化史の研究全般に大いに貢献する可能性があるのだ。

以上の二つの主張を裏付けるために本論文はまず、南アフリカ史研究において、書物史という視点の重要性を説き、またその方向性を示したいいくつかの論文を紹介することで、南アフリカにおける書物史の研究動向を大まかに整理する。その後で、南アフリカにおける書物・出版文化史研究を、第一に南アフリカにおける読書行為を特定の方向へと規定する社会的な制度に注目した研究、第二に、越境——地理的側面だけでなく、言語及びジャンルという点でも——を焦点とした研究という二つに分けて論じることで、活発な南アフリカの書物史研究の全体像を把握することを目指す。

第1節 南アフリカにおける書物・出版文化史の概要

本節では、南アフリカ史における書物・出版文化史研究を概説的に扱った論文及び研究書を検討することで、大まかな研究動向を提示する。

日本においては、本はその存在が当たり前のものとしてある。特に、何を間違ったか、博士課程に進学して、論文を書くようになると、そこら中に本が積み重なり、散らばり、必要な本を見つけ出すのに一苦労ということが常態化する（のは、私だけではないと信じたい）。しかし、まさに「アフリカにおける本」と題された論文で、著者のホフメイヤーたちは、本が当たり前にあるという状態を疑い、本が移植された社会において持つ異質性に着目すべきであると主張する。彼女たちは、ジンバブウェ出身の小説家ダンブーズ・マレチェラの回顧録に言及しながら、この黒人作家の本との出会いをゴミ捨て場に見い出す。ローデシア（現ジンバブウェ）の小さな町ルサペで、白人と黒人の住む場所が

分けられたこの町で、マレチュラは白人たちが捨てたゴミの山から本を拾う。ターザンが、スーパーマンが、スパイダーマンがある。そして、イギリス国内で広く読まれたアーサー・ミーの子どものための百科事典を拾い出す。本は読まれるだけでなく、子どもたちに彼ら自身の「驚異の部屋」のための収集品として珍重される⁴。

植民地における文化現象に関する研究を主導してきたポストコロニアリズムは、植民地における文化を非常に抽象的な形で捉えようとしてきた。それゆえ、ポストコロニアリズムが対象とするのは書物ではなく「テキスト」であった。しかし、この論文でホフメイヤーたちは、「テキスト」の土台となる本の物質性こそ研究の対象とするべきであると述べる。マラチュラが手に入れた本は、イギリスあるいはアメリカで印刷され、船の旅を経て、おそらくはローデシアの首都ソールスベリー（現ハラレ）に、そして田舎町のルサペの白人たちが住む地区に、そして読まれ、使い古された後で黒人地区に隣接するゴミ捨て場へとやってくる。本の来歴を、あるいはこう言ってよければ「伝記」をたどることで見えてくるのは、アフリカと世界との繋がりである⁵。

「アフリカにおける本」の視点を引き継いで、南アフリカにおいて書物史を一つの研究分野として確立させる必要性を宣言した論文が、『南アフリカ歴史研究雑誌』における書物・出版文化史の特集号におけるホフメイヤーとクリールの共著の巻頭論文である。この論文において、彼らは、南アフリカにおける読書文化の形成を、本の存在を自然なものとして扱ってきた他地域の出版文化史研究と対照させることで、また出版文化が成立当初から持ったトランスナショナルな性格に注目することで、南アフリカの歴史研究における書物・出版文化史が世界的な書物史研究に貢献する可能性を指摘する⁶。

ホフメイヤーとクリールの論文以後、南アフリカにおける書物史の研究動向を整理は論文集や学術雑誌特集号の序論においてなされてきた。文学研究の立場からは、ファン・デル・フリースが、テキストの意味を規定し、J. M. クッツェーやアラン・ペイトンなど著名な小説家の作品を社会的な文脈に位置付ける方法として、書物史の成果を取り入れる重要性を指摘する⁷。また最近の事例としては、『南部アフリカ研究雑誌』の特集号序論として執筆されたデーヴィス、ディック及びロウの共著論文がある。彼らは、これまでのアフリカにおける出版文化研究が、宣教師、出版社、植民地行政官など白人に対象が偏り、いかに書物や識字能力がアフリカにもたらされたかという観点が支配的であったと述べ、黒人の出版人や読者に関する研究を行う必要性を説く⁸。

このように、南アフリカにおける書物・出版文化研究は、欧米の研究動向の影響を受けながらも、様々な人種・民族の交流する南アフリカという地域の独

(4)

自性を生かした分野として発展してきた。以下では、具体的な研究成果に言及しながら、読書という行為のあり方を規定する様々な制度という観点から、現在までの研究動向を整理する。

第2節 読書行為の方向付け

書物史における古典的論文「書物史とは何か」において、フランス文化史家ロバート・ダーントンは、読者が何を書物から読み取ったかを明らかにすることは非常に難しいが、読者が置かれた社会状況を再構成することは可能であると指摘する⁹。文学研究・文化理論においては、読書行為に関して二つの対照的な立場が存在する。イーザーに代表される受容理論においては書物における読者の役割がその書物の内部でいかに与えられているかに限定され、それが実際の読者の読み取りと同一視される¹⁰。一方で、ド・セルトーの日常における抵抗論においては、読者の側の自由が主張され、読書という行為の、その時点における意味構成の制限のなさが強調されている¹¹。歴史家の役割は、このどちらの立場にも与することなく、読書行為を支える具体的な制度（出版社、図書館、教育機関、読書会など）を検討することで、どのような読み方がなされていたか、その可能性の幅を確かめることであろう。以下では、読書行為を規定する様々な制度及び能力に注目しつつ、研究動向をまとめていく。

南アフリカにおけるアフリカ人の読書は、その端緒において宣教活動と結びついている。しかし、南アフリカにおいてアフリカ人たちが読書を開始する、といったとき、「読書」という字面から喚起される二つの問い、何が本であるのか、どのような行為が読むということであるかは必ずしも自明ではなかった。南アフリカにおける書物史は、本の形象を問うことから始まったのである。南アフリカの一つの民族コーサ人の口承伝統の研究者であるオップランドは、キリスト教に改宗したアフリカ人が聖書・讚美歌集などの本を、自身の野蛮からの離脱を表すものとして誇示したのに対して、記録されたコーサ語の、イジボンゴ(izibongo)と呼ばれるアフリカ人首長を中心とした伝統的なエリートを讚える頌詩においては、本は、アフリカ人の土地を奪い、税金を取り立てる白人の貪欲さを象徴するものとして出てくると主張する¹²。しかし、宣教団体のもとで教育を受け新しく識字という能力を身につけたアフリカ人も、アフリカ人の伝統に対して必ずしも否定的であったわけではない。ミッション教育を受けたアフリカ人たちは、宣教におけるアフリカ人の主体性を説くだけでなく、伝統的アフリカ人社会における人間性を主題とした本を書いていたのである¹³。

識字能力が及ぼす影響は、この能力を持った人々に限られてはいなかった。

レソトの王モシェシェ自身は識字能力がなかったが、宣教師を書記として利用することによって、植民地政府に意見を伝えた¹⁴。また鉱山労働者たちは、一部の識字能力のある知人に頼んで、家族・恋人に手紙を送ったのである¹⁵。そして識字は、アフリカ社会に声と文字という二分法を持ち込み、識字者と非識字者という人々の分断をもたらした¹⁶。

改宗したアフリカ人たちは、キリスト教文学を自らの生き方の手本とする¹⁷。一方で、特に聖書における予言はアフリカ人自身が白人支配を批判する際の型ともなった¹⁸。ミッション教育を受けたアフリカ人の批判意識は、ズールー人によってズールー語で書かれた初の本『黒い人々：彼らはどこから来たのか (Abantu Abamnyama Lapa Bavela Ngakona)』において、著者であるマゲマ・フゼが、自身が教えを受けたイギリス人宣教師ジョン・コレンゾの著作を引用し、コメントを加えていくという形式を採用した事によく表れている¹⁹。

このようなミッション教育の影響は、現在までも続くものである。例えば、ミッション教育はアフリカ人に対してイギリス古典文学、特にシェイクスピアに親しむことを求め、文学的教養の範型を作り出した。そして、シェイクスピアを読み議論することは、学校においてだけでなく、アパルトヘイト期に多くの政治犯が収監された監獄ロベン島においても続けられていたのである²⁰。

しかし、アフリカ文学における出版事業に大きな影響力を持った宣教団体の出版部は、出版物の内容に統制を加えることもあった。カズンズとグレイは、20世紀初頭のツワナ人知識人ソロモン・プラーイキの小説ムーディーを題材として、この小説を出版する過程で加えられた改変を明らかにしている²¹。

出版物への検閲は、アパルトヘイト体制が白人の少数支配を保持するために、政府を批判する出版物を規制する方針をとっていたため、南アフリカにおける書物史において非常に重要なテーマとなっている。ノーベル賞作家である J. M. クッツェーは、作家たちは自分の作品を検閲官が読むということを意識せずに書くことはできないと述べる²²。しかし、検閲の実施を具体的に検討した研究は、南アフリカの検閲制度には、強権的な抑圧以外の側面があったことを明らかにしてきた。検閲の実施過程を検閲官・出版社・作家という三者の関係から詳細に分析したマクドナルドは、検閲にかけられた本が、純文学と判定されるか、大衆向けと判断されるかによって、審査の厳しさが異なっていたと指摘する。それは、後者の想定読者が、「扇情的な」（すなわち政府に批判的な）内容に影響を受けやすいと検閲官が考えたためであった。この点で、文学者を構成員に含む検閲官は、純文学の領域を定めたと捉えることもできるのだ²³。一方で、検閲と読者の関係に注目したマツチャの研究は、検閲機関が創り出す読者像を検討するとともに、実際の読者の様々な手段で発禁本を読もうとする努

(6)

力を明らかにしている²⁴。

検閲の対象となったのは主に英語・アフリカンス語（オランダ語から派生した言語）という二つのヨーロッパ系言語で書かれた本であり、アフリカの言語で書かれた本は、検閲官の不足からほとんど対象とされなかった。ただし、アフリカ言語で書かれた本の出版においては、採算の取れる読者数を確保することが難しく、学校教育において教科書として指定される見込みがなければ出版されにくいという事情があった。そのため、デーヴィスがオクスフォード大学出版局を事例として主張するように、出版社は人種隔離政策に沿ったカリキュラムを定めた政府の方針に従った本を出版せざるをえなかったのである²⁵。

読者の手に届く本を管理したのは検閲だけでなく、図書館も同様であった。文化史家のディックは、南アフリカの図書館が「望ましくない」とされた本を焼却してきた過去を明らかにした²⁶。しかし図書館は同時に、司書が発禁本を隠し、信頼の置ける利用者のみに見せるという行為によって、発禁にされた本を閲覧する場ともなったのである²⁷。そして植民地及び人種隔離体制下で、人種的・宗教的理由により教育的な恩恵から排除された人々は、自分たちの間で教え合うことで識字能力を高め、必要な知識を身につけていった²⁸。ハーロンは、そのような事例として、南アフリカ南端の都市ケープタウンのムスリム・コミュニティが造った図書館の事例を取り上げている²⁹。

白人と黒人に、また都市と農村に分断された南アフリカ社会において、アフリカ人が本に触れる機会は限られていた。このような状況に対処するためにアメリカのカーネギー財団の助成を得て始められたのが、移動図書館である「非ヨーロッパ人図書館サービス」である。この事業は、アフリカ人に図書館利用の機会を与えただけでなく、英語・アフリカ言語にかかわらず、アフリカ人作家の本をその蔵書として含んでいた³⁰。またズールー人小説家ジョモ (H. I. E. Dhlomo) は、同事業の事務局で働き、アフリカ系アメリカ人の文学作品を導入することに尽力している³¹。

そして、図書館がコミュニティを基盤として造られることがあるように、読書という行為は特定のコミュニティ内でなされると同時に、その行為自体がコミュニティを創り出す。ダーバンのインド系住民によるコーランをアラビア語で読むための読書サークルを検討したジョッピの研究は、コーランを原文で読み、また講師をパキスタンなど国外から招くことで、読書会の参加者たちは、人々を特定の人種的カテゴリーに押しとどめようとするアパルトヘイト体制にもかかわらず、ムスリム、アラビア語読者、そしてインド系ディアスポラというより広がりを持った共同体を創出したと述べる³²。20世紀半ばの南アフリカにおける左派的団体に着目したサンドウィッチの研究は、団体の機関紙、及

び関連する雑誌を検討することで、小説や評論の読み方に関する活発な議論がなされていたことを明らかにした³³。新聞もまた読者が政治や社会について議論する公共圏として機能した。思想史家ショニパ・モコエナは、20世紀初頭から発行を始めたズールー語新聞『イランガ（太陽）』（Ilanga laseNatal）に連載されたマゲマ・フゼのズールー人の歴史に関する記事と、それに対する読者の投稿を検討し、この新聞がズールー人の歴史に関するフォーラムを形成したと主張する³⁴。

識字能力を持ったアフリカ人の意見交換の場となっていたアフリカ人の発行する新聞の多くは、その成立過程において抵抗運動と深く結びついていた。先に述べた『イランガ』は、主要な抵抗団体であるアフリカ民族会議の初代議長ジョン・デュベによって創刊され、また同団体書記のソロモン・プラーイキもツワナ語による新聞を発行している。ケープ植民地においては、19世紀末から20世紀初頭にかけて同地域におけるアフリカ人の運動を主導したジョン・テンゴ・ジャバヴが、南アフリカにおいてアフリカ人が所有する初の新聞『黒人の意見』（Imvo Zabantsundu）を創刊している。このような運動と新聞の結びつきゆえに、現在までに新聞をテーマとする多くの論文集が出版されている³⁵。しかし、新聞をプロパガンダとして利用したのは抵抗運動だけでなく、政府やアフリカ人労働者を多く抱える鉱山業の資本家たちも、アフリカ人向けの新聞を発行し、南アフリカ社会に対するアフリカ人の見解を統制しようとした。ただし、そのような新聞の一つである『ウムテテリ・ワ・バンツ（人々の声）』（Umteteli waBantu）を分析したイーランクは、その設立経緯にもかかわらず、編集部は比較的独立した存在であり、ある程度は人種差別に批判的であったと主張する³⁶。

新聞は、編集の過程で、南アフリカのみならず、アフリカ全体、さらに大陸外からも情報を集め、整理していたという点で非常にトランスナショナルなメディアであった。このことを端的に表すのが、南アフリカ時代のガンディーが発行した新聞『インド人の意見』（Indian Opinion）である。しかし、この新聞を検討したホフメイヤーは、ガンディーが情報の氾濫と人々の生活のスピードが急激に上昇する現代において、いかにゆっくりと読み、深く考えるかを重視し、その実践として『インド人の意見』を捉えていたと主張する。後に世界中の社会運動に影響を与えていくガンディーの思想は、南アフリカのダーバン郊外フェニックスというローカルな場で培われていったのである³⁷。次節では、このようなローカルの中の世界と、世界の中のローカルを捉えるために、南アフリカの書物・出版文化研究を越境というテーマでまとめていきたい。

第3節 越境する読書行為

第1節で言及したホフメイヤーとクリールの共著論文は、南アフリカにおける出版文化の特徴としてトランスナショナリズム（一国を超えた地域的な広がり結びつき）を指摘する³⁸。南アフリカにおける書物・出版文化史において越境は、常に重要なテーマであった。以下では、地理的な意味での越境とともに、言語あるいはジャンルを超えた書物史の可能性を追求した研究の動向を整理していく。

地理的な越境というテーマを、一冊の本『天路歷程』のアフリカを中心とした世界での受容過程をたどることで解き明かしたのが、ホフメイヤーの『ポータブル・バニヤン』である。彼女は、アフリカ言語における翻訳や挿絵の変更を分析し、またアフリカ人が書く多くの小説における『天路歷程』的テーマが見られることを指摘しながら、バニヤンがアフリカの教養文化に与えた深い影響を明らかにしている。しかし、ホフメイヤーは同時にアフリカという場所を経ることで、『天路歷程』が非国教徒の古典という位置付けから、植民地にキリスト教をもたらす宗主国というイメージを支える著作に変化したとも述べており、この研究書は、思想の還流(circulation of ideas)をめぐる模範的な研究書と位置付けることができるだろう³⁹。一冊の本の地理的・言語的越境を対象とした研究としては他にアフリカ人作家トマス・モフォロがソト語で書いたズールー王シャカを題材とした歴史小説が、翻訳され、また序文を付されることで、意味づけが変容する過程を描いたサンドウィッチの研究を挙げることができる。サンドウィッチは、書物における表紙、目次、序文など本文以外の要素が本文の読み方を方向付けるとするパラテキスト論の観点から同書进行分析し、コンテクストの変遷において著者であるモフォロの意向が全く反映されていない点が、アフリカ人作家の置かれていた状況を示唆していると指摘する⁴⁰。翻訳による意味の変化については、他に白人リベラル派の小説家ペイトンの人種隔離を批判的に描いた『叫べ、愛する国よ』(Cry, the Beloved Country)のズールー語訳を検討したサンダースの研究を挙げることができる⁴¹。

ヨーロッパ言語に翻訳されるということがない限り、アフリカ言語で書かれた小説の流通が地域的に限定されたものであったのに対して、南アフリカ国内において英語で書かれた小説は世界的な市場に開かれていた。それゆえ、南アフリカ社会を扱った英語で書かれた小説の南アフリカ国外での受容を扱った研究は数多い。手始めとしてはファン・デル・フリースの論文集に収められた論文が参考になるだろう⁴²。アパルトヘイトという強権的な体制ゆえに白人であっても国外に居住することを選んだ作家も多く、南アフリカ文学史自体がトランスナショナルな視点を抜きにしては書くことができないものとなってい

る⁴³。ただし、特にクツツェーの小説を中心に、南アフリカという文脈からあまりにも離れて読解が行われることへの反発があることも指摘しておきたい⁴⁴。

ホフメイヤーとサンドウィッチの研究が示唆するように、書物の国際的な移動には、宣教という背景があった。宣教以外に越境を支える「インフラストラクチャー」に注目した研究としては、著作権の問題を植民地における書籍の流通という観点から扱ったホフメイヤーの論文⁴⁵や、国際的な新聞社間の協定による記事の交換制度を扱ったピーターソンとホフメイヤーの共著論文を挙げるができる⁴⁶。

また資料の実際の利用という観点からは、南アフリカにおけるデジタル化の進展を扱ったブレケンリッジの論文が重要である。これまで述べてきた『イランガ』などの新聞や、抵抗運動におけるパンフレットなど、南アフリカにおいては 2000 年代に入ってから様々な資料がデジタル化され、国外からも容易にアクセスすることが可能になった。しかし、例えば『イランガ』のデジタル版にアクセスするためには、所属する大学が特定のデータベースに契約していること⁴⁷が必要であるなど制約がある。この点と関連して、南アフリカにおけるデジタル化は、アメリカの財団からの助成に依拠している部分が多く、資料を公開するデータベースの選択など公開の形を中心としてデジタル化された資料の所有権をめぐる論争を引き起こしている⁴⁸。

地域的・言語的な越境とともに重要なのが、オーラリティとリテラシーの相互に影響を与える関係である。南アフリカにおける書物史的視点を取り入れた歴史研究は、声から文字へという一方通行的な流れを問題視し、文字から声へという方向も含めた循環的なあり方を明らかにしてきた。

この点を明瞭に表しているのが、ヨーロッパ宣教団から分離したアフリカ人の教会を扱った研究である。ヨーロッパ人宣教師が運営する教会から分離し、アフリカ人独自の教会を設立する運動はすでに 19 世紀後半から見られる。ズールー人の中で信徒数の多いシェンベ教会を対象とするカブリタの研究は、教祖の言葉を記録し、それを聖書のようにまとめるという口頭から文書へという流れとともに、宣教の過程においては記録された教祖の言葉を、いかにアフリカ人の口頭伝承の文化に沿った説教として即興で再現することができるかが重要であったと主張する。カブリタの研究は、リテラシーからオーラリティへの変換の要素を強調するのである⁴⁹。また、20 世紀後半にはアフリカ人の伝承として語られる物語が、学校で習った教科書に収録されている民話に影響されているとする研究もある⁵⁰。歴史を語り、記録するという観点からは、アパルトヘイト時代の犯罪を明らかにし、和解を促すために設置された真実和解員会に関する研究が重要であろう。しかし、移行期的正義のモデルとも見なされ

る真実和解委員会の記録が、アフリカ人の伝統と歴史に基づいた語りのニュアンスを正確には反映していないと主張する詩人で小説家のアンキー・クロッホを中心とした調査もある⁵¹。すでに多くの研究がなされている真実和解委員会であるが、この委員会が残した膨大な証言記録を歴史資料という観点から分析することには、大いなる可能性が残されている。南アフリカ国外に目を向けるならば、ルワンダにおける移行期的正義の法廷であるガチャチャにおける証言が、独立以前から続く聖書を読むことで、また教会で説教を受けたことによって得た知識と、告白という形式に基づいていると主張するデレク・ピーターソンの高い評価を受けた研究がある⁵²。ピーターソンや先に述べたカブリタに代表されるこのような研究動向は、リテラシーとオーラリティに関してどちらか一方だけを純化させた形で捉えるのではなく、両者の相互関係に注目する必要性を明らかにしているのだと考えることができるだろう。

おわりに

南アフリカの書物・出版文化史の今後の展望について簡単に述べて本論文を終えることにしたい。

アフリカにおける書物・出版文化史研究においては、通史的な形で書物史の動向を書くことはできないだろうし、また書くことにそこまで意義があるとは思えない⁵³。しかし、アフリカ、特に南アフリカは、書物・出版文化史の基本的な前提を問題化し、理論的な議論を推し進めるという点で大きな貢献をする可能性を秘めた地域として捉えることができる。第一に、オーラリティとリテラシーの問題系がある。フィンケルシュタインとマクリーリーに代表される西欧を中心とする書物史の概説は、オーラリティから写本（スクリプト）、写本から印刷へと一元的に進むという見方を提示してきた⁵⁴。しかし、南アフリカも含むヨーロッパによって植民地化された多くの地域においては、文字・写本（手書き）・印刷という三者が同時にもたらされた。ポストコロニアルの観点からの書物史の概説書を執筆したフレイザーは、この点を植民地における書物史の特徴として指摘する⁵⁵。そして、先に述べたように、南アフリカを事例とした書物・出版文化史の研究は、文字の列の中に声を聞き取り、口頭伝承や発言の中にテキストを読み取っていく必要性を指摘し、実践した事例と考えることができる。さらにオーラリティとリテラシーの混淆性に着目することは、アフリカを無文字社会と捉え、文字資料を等閑視する傾向があった日本のアフリカ史研究に見直しを迫るものともなっている⁵⁶。

第二に、イザベル・ホフメイヤーが主導して推し進めてきた、トランスナショナルな視角からの書物・出版文化史研究の可能性を指摘することができるだ

ろう。ホフメイヤーに代表されるトランスナショナルな視点からの書物・出版文化史は、南アフリカを識字や書物が宗主国からもたらされる周辺部としてではなく、その場所を介することで宗主国の自己規定自身の変容を遂げる思想の循環過程の一部として捉える視点を提示し⁵⁷、またインドと南アフリカの結び付きからインド洋世界の思想的広がり进行を考察する⁵⁸。それゆえに、ホフメイヤーの研究は、少なくとも現時点においては、ヨーロッパ・アメリカからアジア・アフリカへと主役の交代が見込まれる今世紀⁵⁹における新しい世界史象の描き方を考察する際に、南アフリカを起点としたグローバルヒストリーの一つのモデルとなるものであると考えることができるだろう。

本論文は、すでに多くの研究がなされている南アフリカを中心とした書物・出版文化史の研究動向を紹介し、整理することを試みた。言及することのできなかった研究も多いが、本論文が、書物・出版文化史研究においてアフリカを対象地域として含めることの必要性と、アフリカ研究において書物・出版文化という観点の重要性が理解されることにつながれば幸いである。

¹ David Attwell, *Rewriting Modernity: Studies in Black South African Literary History* (Athens: Ohio University Press, 2005), 27–28.

² Attwell, 28. 銃を避ける力を授ける魔除けという伝承は、植民地支配への武力的反乱において、よく見られる。例えば、水（マジ）にそのような力があるとされたタンザニアにおけるドイツの植民地支配に抗するマジマジの反乱を挙げることができる。宮本正興・松田素二編『新書アフリカ史、改訂新版』（講談社、2018）、444。

³ 例えば、以下の英語圏における書物史の代表的な概説書及び研究案内において、アフリカへの言及はほとんどなされていない。David Finkelstein and Alistair McCleery, *Introduction to Book History*, 2nd edition (New York: Routledge, 2012); David Finkelstein and Alistair McCleery, eds., *The Book History Reader*, 2nd ed (New York: Routledge, 2006); Simon Eliot and Jonathan Rose, eds., *A Companion to the History of the Book*, 1 edition (Malden, MA: Wiley-Blackwell, 2009); Leslie Howsam, *The Cambridge Companion to the History of the Book* (Cambridge; New York: Cambridge University Press, 2014).

⁴ Isabel Hofmeyr, Sarah Nuttall, and Cheryl Ann Michael, “The Book in Africa,” *Current Writing: Text and Reception in Southern Africa* 13, no. 2 (January 1, 2001): 1–2, <https://doi.org/10.1080/1013929X.2001.9678100>.

⁵ Hofmeyr, Nuttall, and Michael, 7.

⁶ Isabel Hofmeyr and Lize Kriel, “Book History in Southern Africa: What Is It and Why Should It Interest Historians?,” *South African Historical Journal* 55, no. 1 (January 1, 2006): 1–19, <https://doi.org/10.1080/02582470609464927>.

⁷ Andrew Edward Van der Vlies, ed., *Print, Text and Book Cultures in South Africa* (Johannesburg: Witwatersrand University Press, 2012).

- ⁸ Caroline Davis, Archie Dick, and Elizabeth le Roux, “Introduction: Print Culture in Southern Africa,” *Journal of Southern African Studies* 44, no. 3 (May 4, 2018): 377–81, <https://doi.org/10.1080/03057070.2018.1452379>.
- ⁹ ロバート・ダーントン, 「書物史とは何か」『歴史の白昼夢: フランス革命の18世紀』海保真夫・坂本武訳 (河出書房新社, 1994), 79–111.
- ¹⁰ ウォルフガング・イーザー『行為としての読書: 美的作用の理論』轡田収訳 (岩波書店, 2005).
- ¹¹ ミッシェル・ド・セルトー『日常実践のポイエティック』山田登世子訳 (国文社, 1987).
- ¹² Jeff Opland, “The Image of the Book in Xhosa Oral Poetry,” *Current Writing: Text and Reception in Southern Africa* 7, no. 2 (January 1, 1995): 31–47, <https://doi.org/10.1080/1013929X.1995.9677958>.
- ¹³ Isabel Hofmeyr, “Metaphorical Books,” *Current Writing: Text and Reception in Southern Africa* 13, no. 2 (January 1, 2001): 100–108, <https://doi.org/10.1080/1013929X.2001.9678108>; Attwell, *Rewriting Modernity*, chap. 2.
- ¹⁴ Leonard Thompson, *Survival in Two Worlds: Moshoeshe of Lesotho, 1786-1870* (Oxford: Clarendon Press, 1975).
- ¹⁵ Keith Breckenridge, “Love Letters and Amanuenses: Beginning the Cultural History of the Working Class Private Sphere in Southern Africa, 1900-1933,” *Journal of Southern African Studies* 26, no. 2, (2000): 337–48.
- ¹⁶ Jeff Guy, “Making Words Visible: Aspects of Orality, Literacy, Illiteracy and History in Southern Africa,” *South African Historical Journal* 31, no. 1 (November 1994): 3–27, <https://doi.org/10.1080/02582479408671795>.
- ¹⁷ Isabel Hofmeyr, *The Portable Bunyan: A Transnational History of the Pilgrim’s Progress* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 2004).
- ¹⁸ J. B. Peires, *The Dead Will Arise: Nongqawuse and the Great Xhosa Cattle Killing Movement of 1856-7* (Johannesburg: Ravan Press, 1989).
- ¹⁹ Hlonipha Mokoena, *Magema Fuze: The Making of a Kholwa Intellectual* (Scottsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2011).
- ²⁰ Isabel Hofmeyr, “Reading Debating/Debating Reading: The Case of the Lovedale Literary Society, or Why Mandela Quotes Shakespeare,” in *Africa’s Hidden Histories: Everyday Literacy and Making the Self*, ed. Karin Barber (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 2006), 258–77; Ashwin Desai, *Reading Revolution: Shakespeare on Robben Island* (Pretoria: Unisa Press, 2012).
- ²¹ Tim Couzens and Stephen Gray, “Printers’ and Other Devils: The Texts of Sol T. Plaatje’s ‘Mhudi,’” *Research in African Literatures* 9, no. 2 (1978): 198–215. ムーディーを出版したスコットランド宣教師の運営するラヴデール学院出版局の歴史については、Jeffrey Peires, “The Lovedale Press: Literature for the Bantu Revisited,” *History in Africa* 6 (1979): 155–75, <https://doi.org/10.2307/3171744>を参照。
- ²² J. M. Coetzee, *Giving Offense: Essays on Censorship* (Chicago: University of Chicago Press, 1996), chap. 10.
- ²³ Peter D. McDonald, *The Literature Police: Apartheid Censorship and Its Cultural Consequences* (Oxford: Oxford University Press, 2009).

- ²⁴ Rachel Matteau Matsha, *Real and Imagined Readers: Censorship, Publishing and Reading under Apartheid* (Scottsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2019).
- ²⁵ Caroline Davis, “Histories of Publishing under Apartheid: Oxford University Press in South Africa,” *Journal of Southern African Studies* 37, no. 1 (March 1, 2011): 79–98, <https://doi.org/10.1080/03057070.2011.552545>.
- ²⁶ Archie L. Dick, *The Hidden History of South Africa’s Book and Reading Cultures* (Toronto: University of Toronto Press, 2012), chap. 5.
- ²⁷ Dick, chap. 6; Matsha, *Real and Imagined Readers*.
- ²⁸ Dick, *The Hidden History of South Africa’s Book and Reading Cultures*, chaps. 1–2.
- ²⁹ Muhammed Haron, “A Window into the World of Personal and Community Libraries: Case Studies from the Cape Muslim Community,” *Current Writing: Text and Reception in Southern Africa* 13, no. 2 (January 1, 2001): 56–65, <https://doi.org/10.1080/1013929X.2001.9678105>.
- ³⁰ Maxine K. Rochester, “The Carnegie Corporation and South Africa: Non-European Library Services,” *Libraries & Culture* 34, no. 1 (1999): 27–51.
- ³¹ Tim Couzens, *The New African: A Study of the Life and Work of H.I.E. Dhlomo* (Johannesburg: Ravan Press, 1985).
- ³² Shamil Jeppie, *Language Identity Modernity: The Arabic Study Circle, of Durban* (Cape Town: HSRC Press, 2007).
- ³³ Corinne Sandwith, *World of Letters: Reading Communities and Cultural Debates in Early Apartheid South Africa* (Pietermaritzburg, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2014).
- ³⁴ Hlonipha Mokoena, “An Assembly of Readers: Magema Fuze and His Ilanga Lase Natal Readers,” *Journal of Southern African Studies* 35, no. 3 (September 1, 2009): 595–607, <https://doi.org/10.1080/03057070903101839>.
- ³⁵ 主要なものとしては、以下の文献を挙げることができる。Les Switzer and Donna Switzer, *The Black Press In South Africa And Lesotho* (Boston: Hall, 1979); Les Switzer, ed., *South Africa’s Alternative Press: Voices of Protest and Resistance, 1880s-1990s* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997); Les Switzer and Mohamed Adhikari, eds., *South Africa’s Resistance Press: Alternative Voices in the Last Generation under Apartheid* (Athens, OH: Ohio University Center for International Studies, 2000); Peter Limb, ed., *The People’s Paper: A Centenary History & Anthology of Abantu-Batho* (Johannesburg: Wits University Press, 2012).
- ³⁶ Natasha Erlank, “Umteteli Wa Bantu and the Constitution of Social Publics in the 1920s and 1930s,” *Social Dynamics* 45 (April 22, 2019): 75–102, <https://doi.org/10.1080/02533952.2019.1589329>.
- ³⁷ Isabel Hofmeyr, *Gandhi’s Printing Press: Experiments in Slow Reading* (Cambridge, Mass.; London, England: Harvard University Press, 2013).
- ³⁸ Hofmeyr and Kriel, “Book History in Southern Africa.”
- ³⁹ Hofmeyr, *The Portable Bunyan*. ホフメイヤーは、以下の論文で、書物史におけるイギリス本国の植民地を介した自己像の形成というテーマをより理論的に追求している。Isabel Hofmeyr, “The Globe in the Text: Towards a Transnational History of the Book,” *African Studies* 64, no. 1 (July 2005): 87–103, <https://doi.org/10.1080/00020180500139080>.
- ⁴⁰ Corinne Sandwith, “History by Paratext: Thomas Mofolo’s Chaka,” *Journal of Southern African Studies* 44, no. 3 (May 4, 2018): 471–90, <https://doi.org/10.1080/03057070.2018.1445355>. パラテキストについてはジェラルド・ジュネット『スイユ：テキストから書物へ』和泉涼一訳（水声

社, 2001).を参照。

⁴¹ Mark Sanders, *Learning Zulu: A Secret History of Language in South Africa* (Princeton: Princeton University Press, 2016), chap. 2.

⁴² Van der Vlies, *Print, Text and Book Cultures in South Africa*.

⁴³ 南アフリカ文学史を概観した研究書として、David Attwell and Derek Attridge, eds., *The Cambridge History of South African Literature* (New York: Cambridge University Press, 2011).を参照。

⁴⁴ Carli Coetzee, *Accented Futures: Language Activism and the Ending of Apartheid* (Johannesburg: Wits University Press, 2013), 149–56.

⁴⁵ Isabel Hofmeyr, “Colonial Copyright, Customs, and Port Cities: Material Histories and Intellectual Property,” *Comparative Literature* 70, no. 3 (September 1, 2018): 264–77, <https://doi.org/10.1215/00104124-6991700>.

⁴⁶ Isabel Hofmeyr and Derek R. Peterson, “The Politics of the Page: Cutting and Pasting in South African and African-American Newspapers,” *Social Dynamics* 45 (2019): 1–25, <https://doi.org/10.1080/02533952.2019.1589333>.

⁴⁷ 具体的にはリーデックス社の運営するアフリカ・ニューズペーパー・アーカイブズであるが、残念ながら一橋大学図書館は契約していない。 <https://www.readex.com/content/african-newspapers-series-1-and-2-1800-1925-0>

⁴⁸ Keith Breckenridge, “The Politics of the Parallel Archive: Digital Imperialism and the Future of Record-Keeping in the Age of Digital Reproduction,” *Journal of Southern African Studies* 40, no. 3 (May 4, 2014): 499–519, <https://doi.org/10.1080/03057070.2014.913427>.

⁴⁹ Joel Cabrita, *Text and Authority in the South African Nazareth Church* (Cambridge University Press, 2014).

⁵⁰ Isabel Hofmeyr, *We Spend Our Years as A Tale That Is Told”: Oral Historical Narrative in a South African Chieftom* (Portsmouth, NH: Heinemann, 1993).

⁵¹ Antjie Krog, N. L. Mpolweni-Zantsi, and Kopano Ratele, *There Was This Goat: Investigating the Truth Commission Testimony of Notrose Nobomvu Konile* (Scottsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2009).

⁵² Derek R. Peterson, *Ethnic Patriotism and the East African Revival: A History of Dissent, c. 1935-1972* (Cambridge: Cambridge University Press, 2013).

⁵³ 通史の形で書物史をまとめた例としては、アメリカ合衆国における書物の歴史を植民地時代から現代まで5巻本としてまとめた David D. Hall ed. *A History of the Book in America*, 5 vols. (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2000–2010). を挙げることができる。

⁵⁴ Finkelstein and McCleery, *Introduction to Book History*.

⁵⁵ Robert Fraser, *Book History through Postcolonial Eyes: Rewriting the Script* (London: Routledge, 2008).

⁵⁶ しかし、西アフリカを舞台に無文字社会における歴史意識論を展開した川田順造『無文字社会の歴史：西アフリカ・モシ族の事例を中心に』（岩波書店, 2001).は、多くの古典がそうであるように含蓄深く、文字と口承伝統の混淆を指摘している。問題は、口承伝統こそが社会の基底にあると捉えられ、混淆の具体的あり方が追求されなかったことにあるのだろう。

⁵⁷ Hofmeyr, *The Portable Bunyan*.

⁵⁸ Hofmeyr, *Gandhi's Printing Press*. また南アフリカにおけるインド洋世界研究については、Pamila Gupta, Isabel Hofmeyr, and M. N. Pearson, eds., *Eyes across the Water: Navigating the Indian Ocean* (Pretoria: Unisa Press, 2010). も参照。

⁵⁹ 峯陽一『2100年の世界地図: アフラシアの時代』(岩波書店, 2019).